

## 第4章 日常の生活空間に対する認識



## 第4章 日常の生活空間に対する認識

### 1. 居住地に対する希望（問7）

#### (1) 居住の意向（問7）

今住んでいるところに今後も住みたいと思うか、県民の居住に対する希望について、5つの選択肢から選んでもらった。

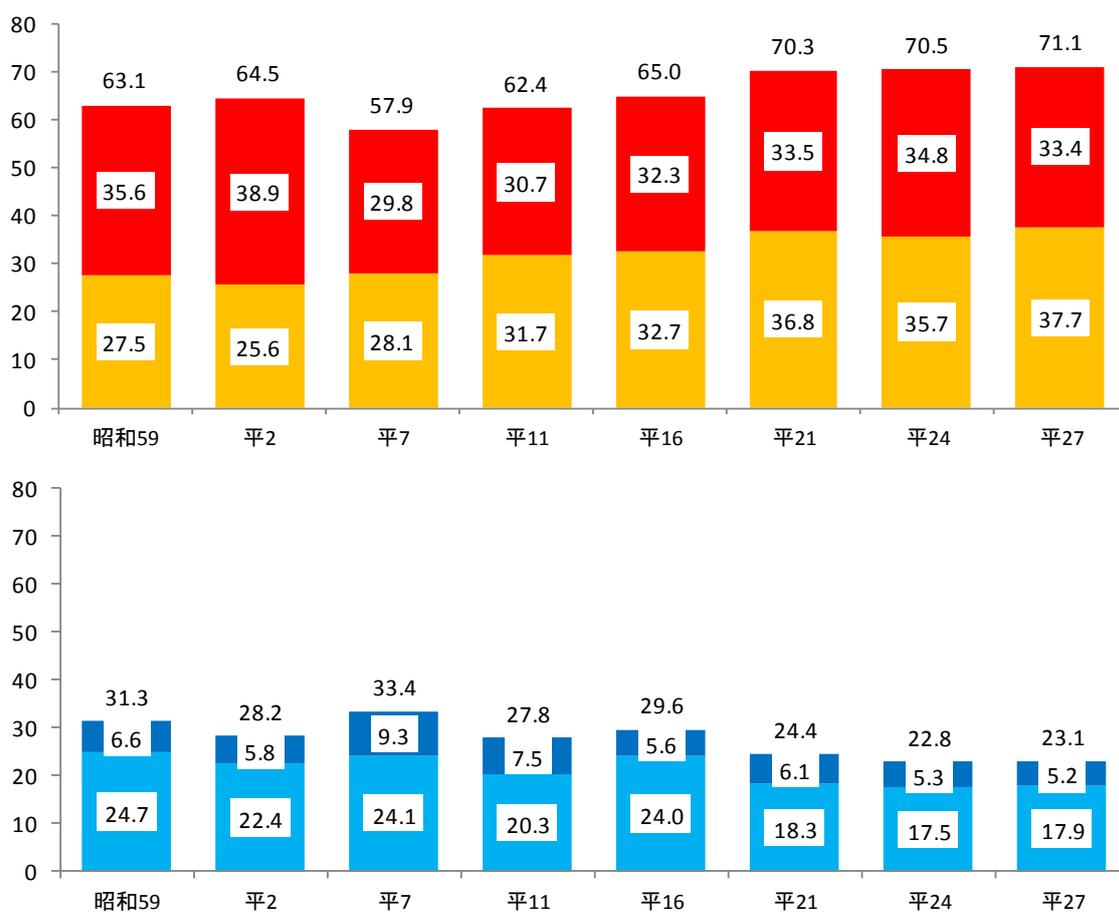
「いつまでも今住んでいるところに住みたい」と考えている「永住志向型」と「特に住み続けたいというほどではないがよそに移る気もない」と考えている「現住地居住志向型」の2つを「定住型」として、「できれば今すぐにでもよそへ移りたい」と考える「即移転志向型」と「いつかはよそへ移りたい」と考える「潜在的移転志向型」の2つを「移転型」に分類した。

また、そう考える理由や、よそに移りたいと回答した者についてはその移転希望先を5つの選択肢から選んでもらった。

「定住型」は前回と比較して0.6ポイント増の71.1%。「移転型」は前回と比較して0.3ポイント増の23.1%を示して県全体として今までと同様に移転意向より定住意向がより強いことを示している。

時系列で見ると、平成11年に「現住地居住志向型」は「永住志向型」と逆転して、「永住志向型」の比率を「現住地居住志向型」の比率が上回る傾向が今回まで継続している。

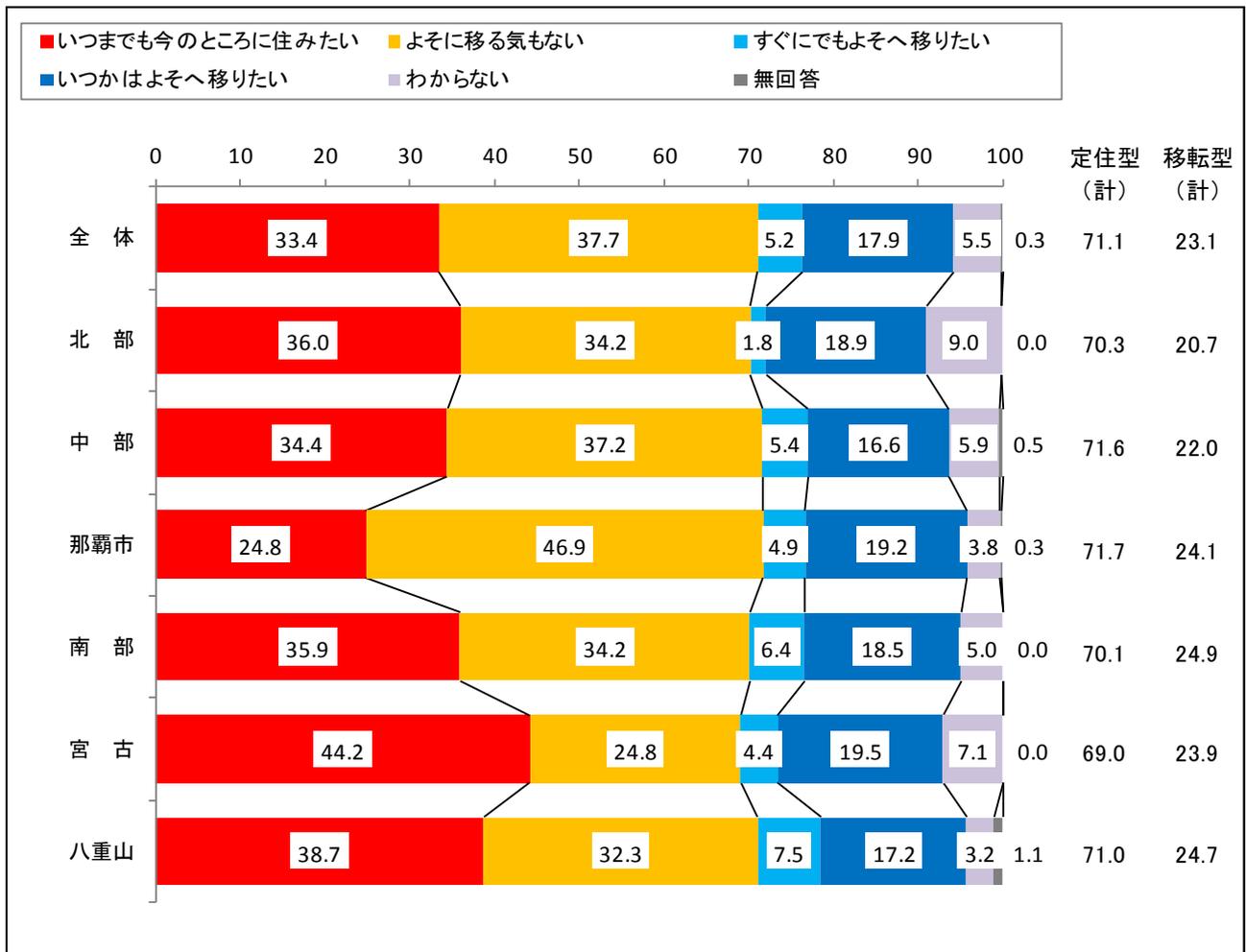
図 4-1-1 居住の意向 (%)



定住型	■ 永住志向型	いつまでも今住んでいるところに住みたい
	■ 現住地居住志向型	特に住み続けたいというほどではないがよそに移る気もない
移転型	■ 即移転志向型	できれば今すぐにでもよそへ移りたい
	■ 潜在的移転志向型	いつかはよそへ移りたい

居住の意向を地域別に見ると、すべての地域で「定住型」が7割前後、「移転型」が2割台前半とあまり差は見られない。「定住型」のうち、「いつまでも今のところに住みたい」は宮古で44.2%と最も高く、那覇市で24.8%と最も低くなっている。逆に「よそに移る気もない」は那覇市で46.9%と最も高く、宮古で24.8%と最も低くなっている。

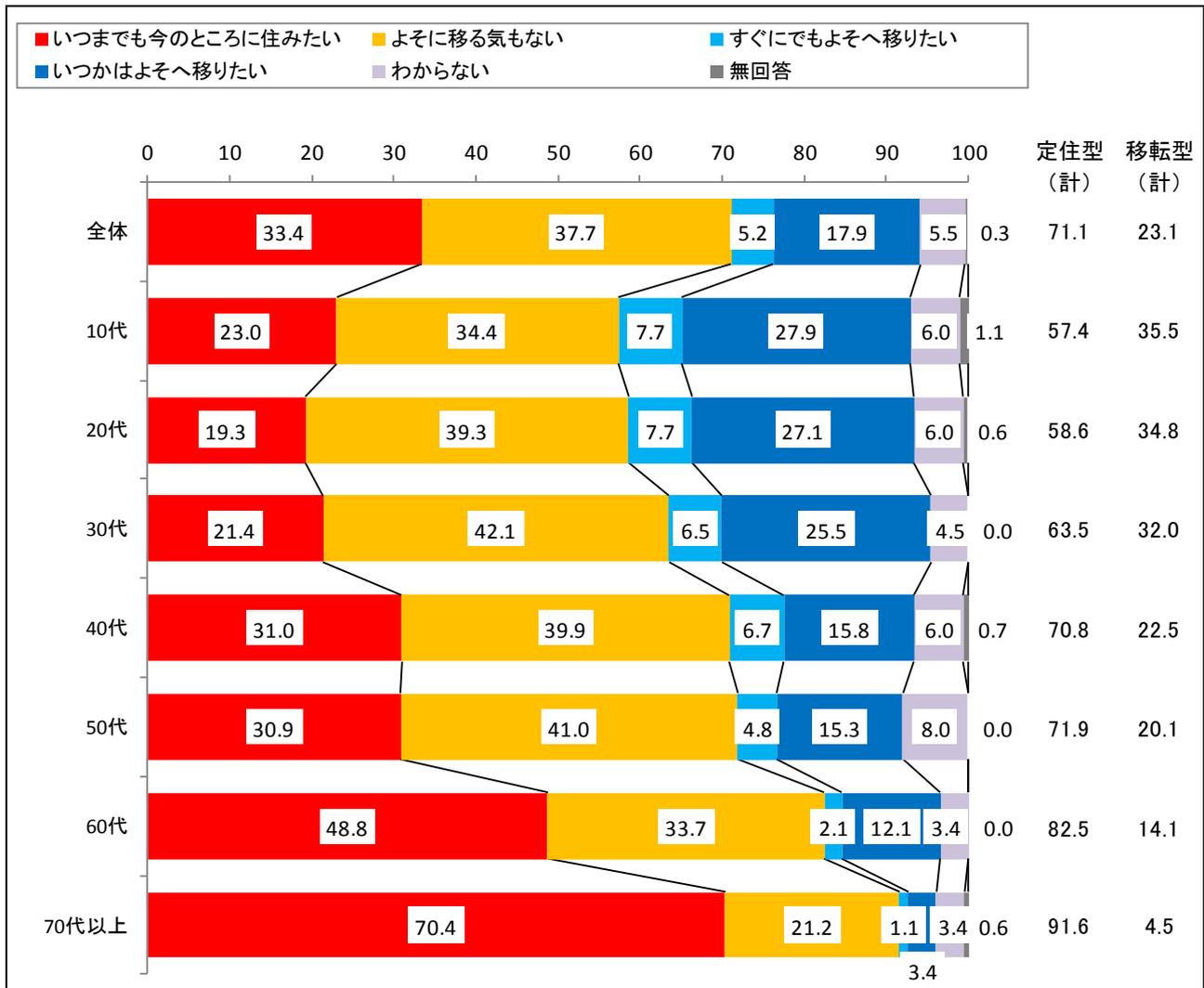
図 4-1-2 地域別 居住の意向 (%)



居住の意向を年代別に見ると、図4-1-3から明らかなように、年代が上がるほど、定住の意向が強くなる。「定住型」は10代で57.4%、20代で58.6%と最も低く、年代が上がるにつれて高くなり、30代(63.5%)で6割台、40代(70.8%)、50代(71.9%)で7割台、60代(82.5%)で8割台、70代以上(91.6%)で9割を超える。

これに対して、「いつかはよそへ移りたい」と考えている人は年代が下がるほど比率が高くなり、30代(25.5%)、20代(27.1%)、10代(27.9%)が2割を超えている。

図4-1-3 年代別 居住の意向 (%)

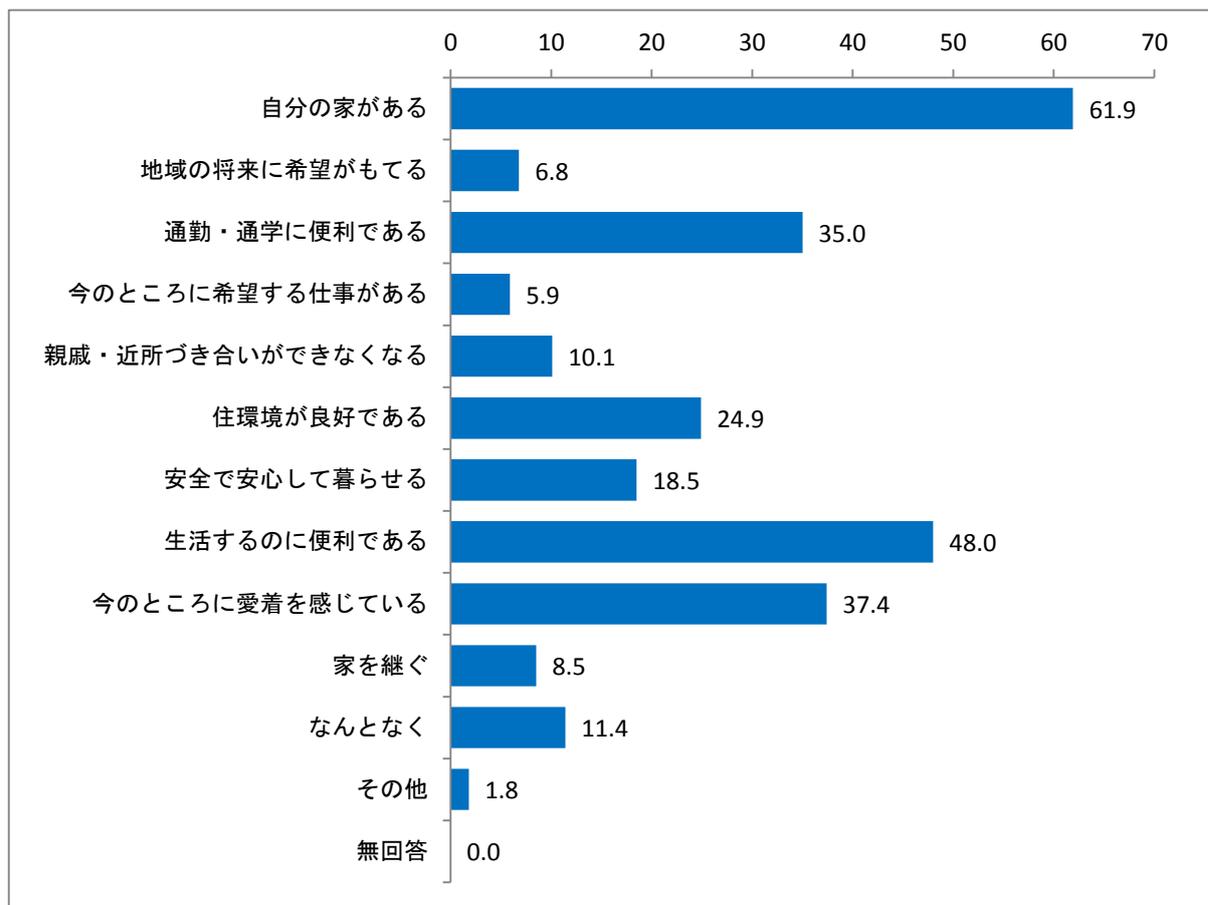


## (2) 定住希望の理由 (問 7-1)

「定住型」の回答者に対して、定住を希望する理由を3つ選択してもらった。

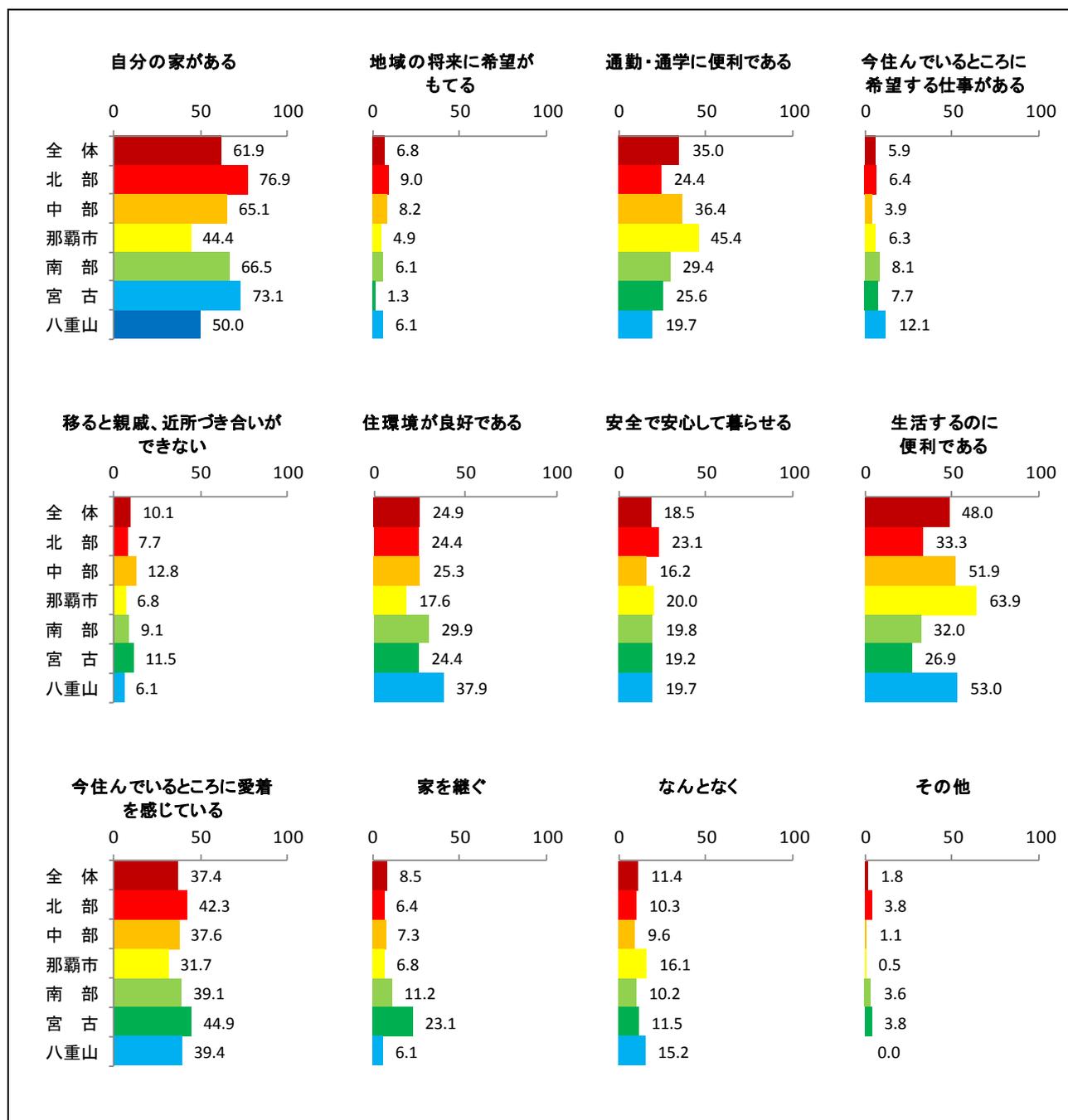
前回の結果と同じように「自分の家がある」(61.9%)が最も高く、続いて「生活するのに便利である」(48.0%)、「今住んでいるところに愛着を感じている」(37.4%)、「通勤・通学に便利である」(35.0%)が上位に挙げられている。この傾向は前回調査と同様であるが、3位の「今住んでいるところに愛着を感じている」の比率が前回調査の50.2%から今回は37.4%と12.8ポイントの低下となっている。

図 4-1-4 定住希望の理由 (%)



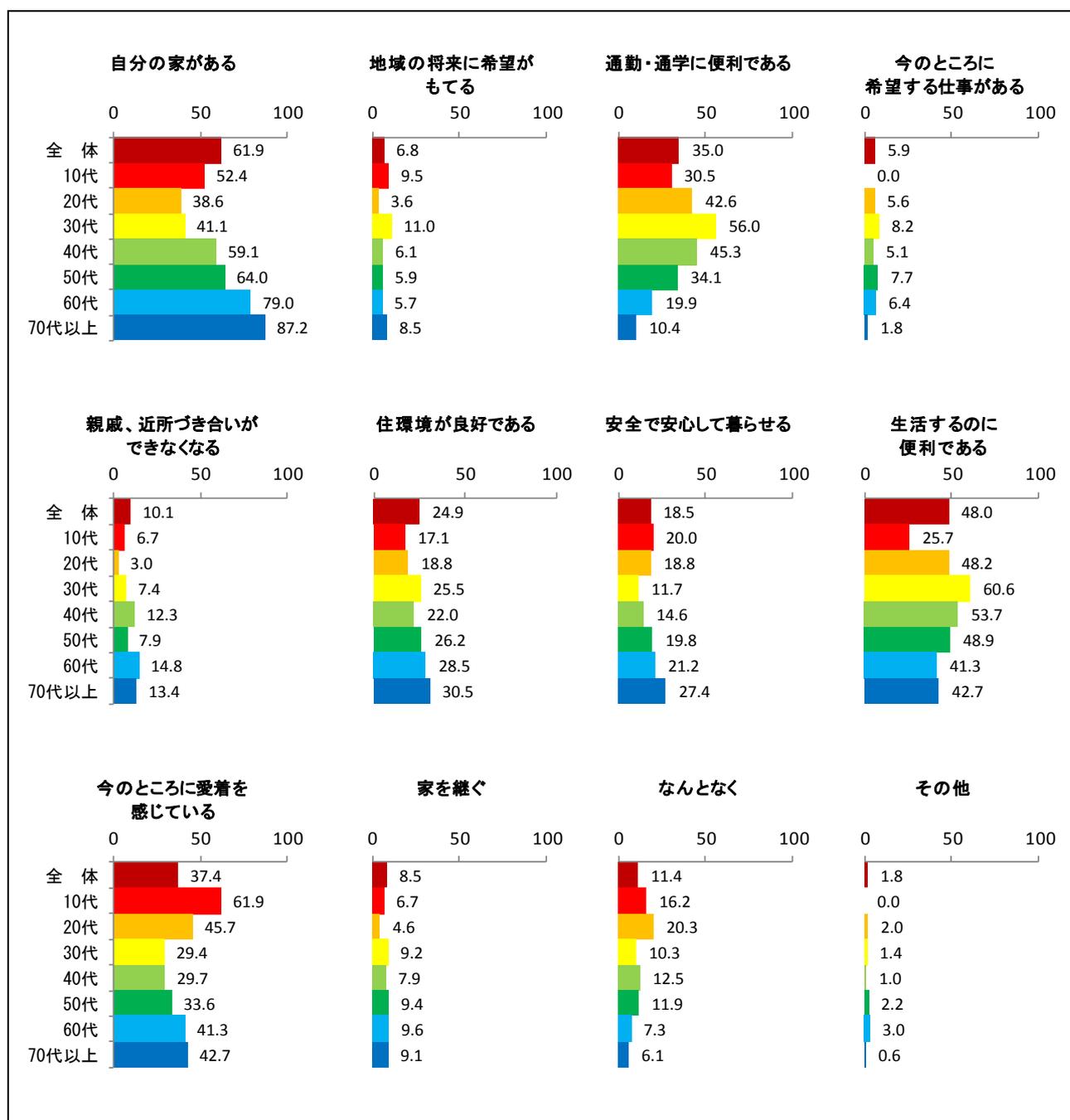
定住希望の理由を地域別に見たものが図4-1-5である。全体で最も高い数値を示した「自分の家がある」という理由は那覇市で44.4%、八重山で50.0%と他の地域より低くなっているが、北部で76.9%、宮古で73.1%と高く、地域差が大きい。「生活するのに便利である」「通勤・通学に便利である」は、那覇市でそれぞれ63.9%、45.4%と他の地域に比べ高く、那覇市では生活の利便性を挙げた人が多い。このほか、「住環境が良好である」は八重山で37.9%、「家を継ぐ」は宮古で23.1%と高いことが特徴的である。

図4-1-5 地域別 定住希望の理由 (%)



年代別で定住希望の理由を見たものが図 4-1-6 である。「自分の家がある」と回答したのは、20代で 38.6%と最も低く、それ以降年代が上がるにしたがって比率が高くなり、60代で 79.0%、70代以上で 87.2%と、年齢が高くなるほど自分の持家での定住意向が高まることを表している。「通勤・通学に便利である」と回答したのは、30代が 56.0%と最も高く、次いで 40代が 45.3%、20代が 42.6%と通勤・通学の当事者と考えられる年代で高くなっている。「生活するのに便利である」は、30代で 60.6%、40代で 53.7%と他の年代よりも高くなっている。「今住んでいるところに愛着を感じている」は、10代で 61.9%と最も高くなっている。

図 4-1-6 年代別 定住希望の理由 (%)

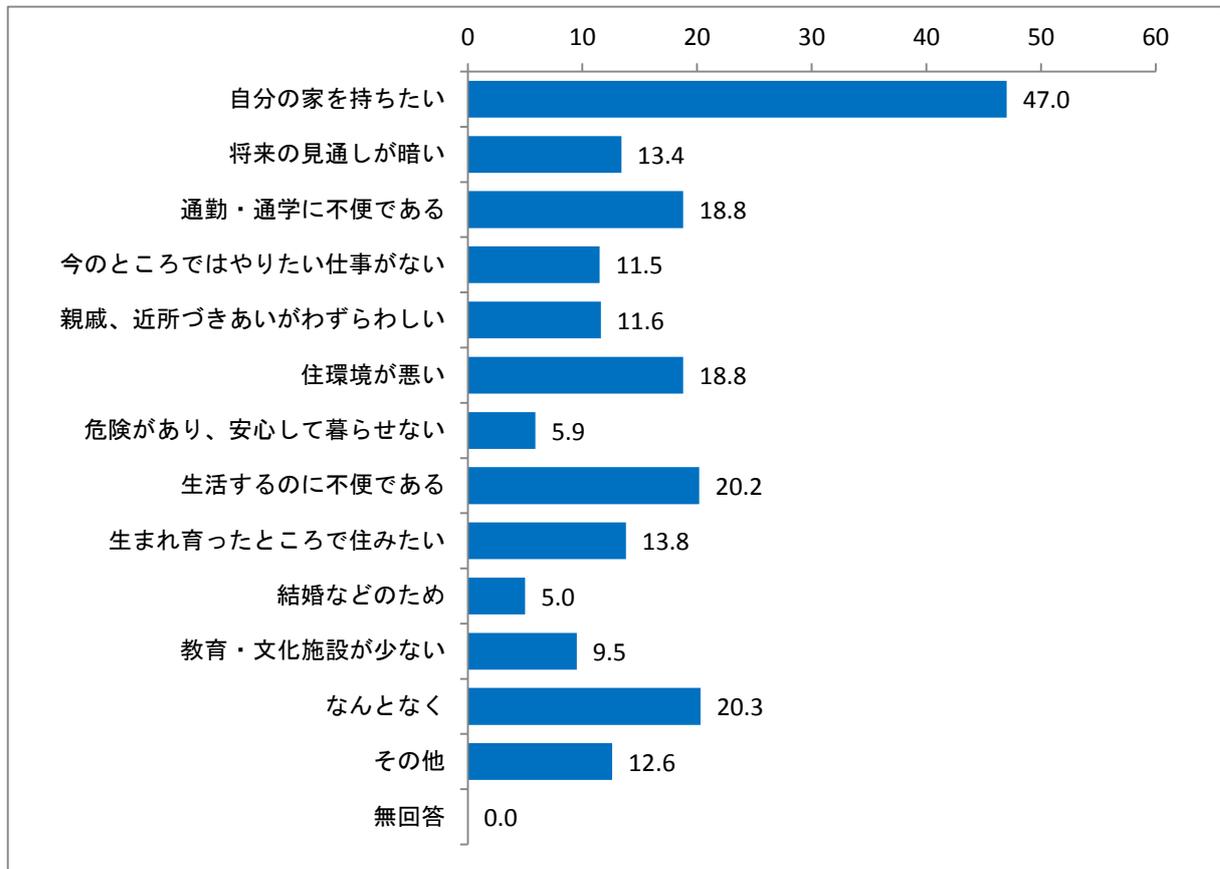


### (3) 移転希望の理由 (問 7-2)

「移転型」の回答者に対して、移転を希望する理由を3つ選択してもらった。

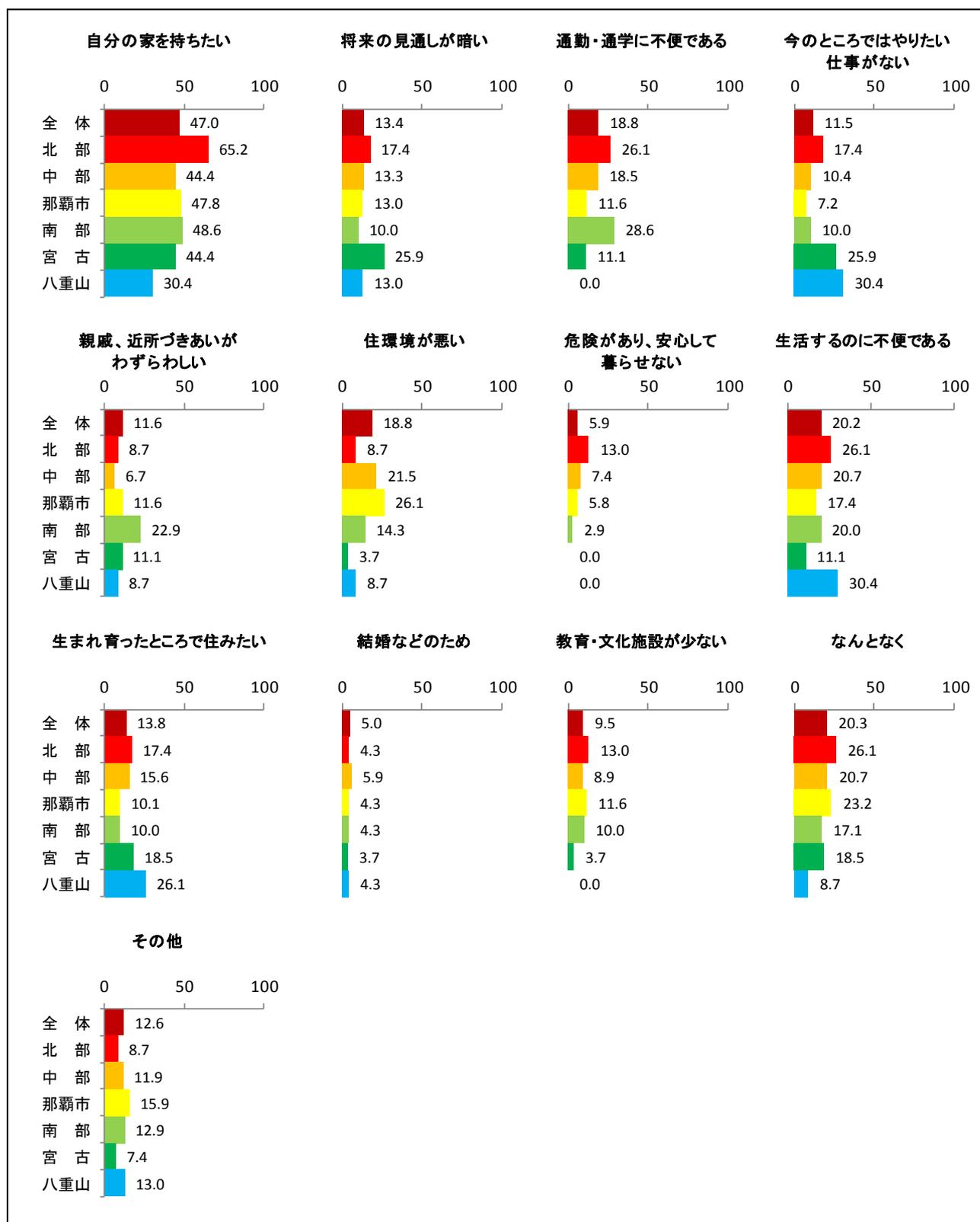
前回同様「自分の家を持ちたい」(47.0%)が最も高く、他の理由を大きく離している。「なんとなく」(20.3%)という回答を除くと、「生活するのに不便である」(20.2%)、「通勤・通学に不便である」「住環境が悪い」(共に18.8%)を理由とする人が多い。しかし、前回調査と比較すると、「自分の家を持ちたい」「住環境が悪い」「今住んでいる地域は将来の見通しが暗い」の比率は減少した。一方、「通勤・通学に不便である」「生活するのに不便である」「教育・文化施設が少ない」「結婚などのため」「親戚、近所づきあいがわずらわしい」の比率は増加した。

図 4-1-7 移転希望の理由 (%)



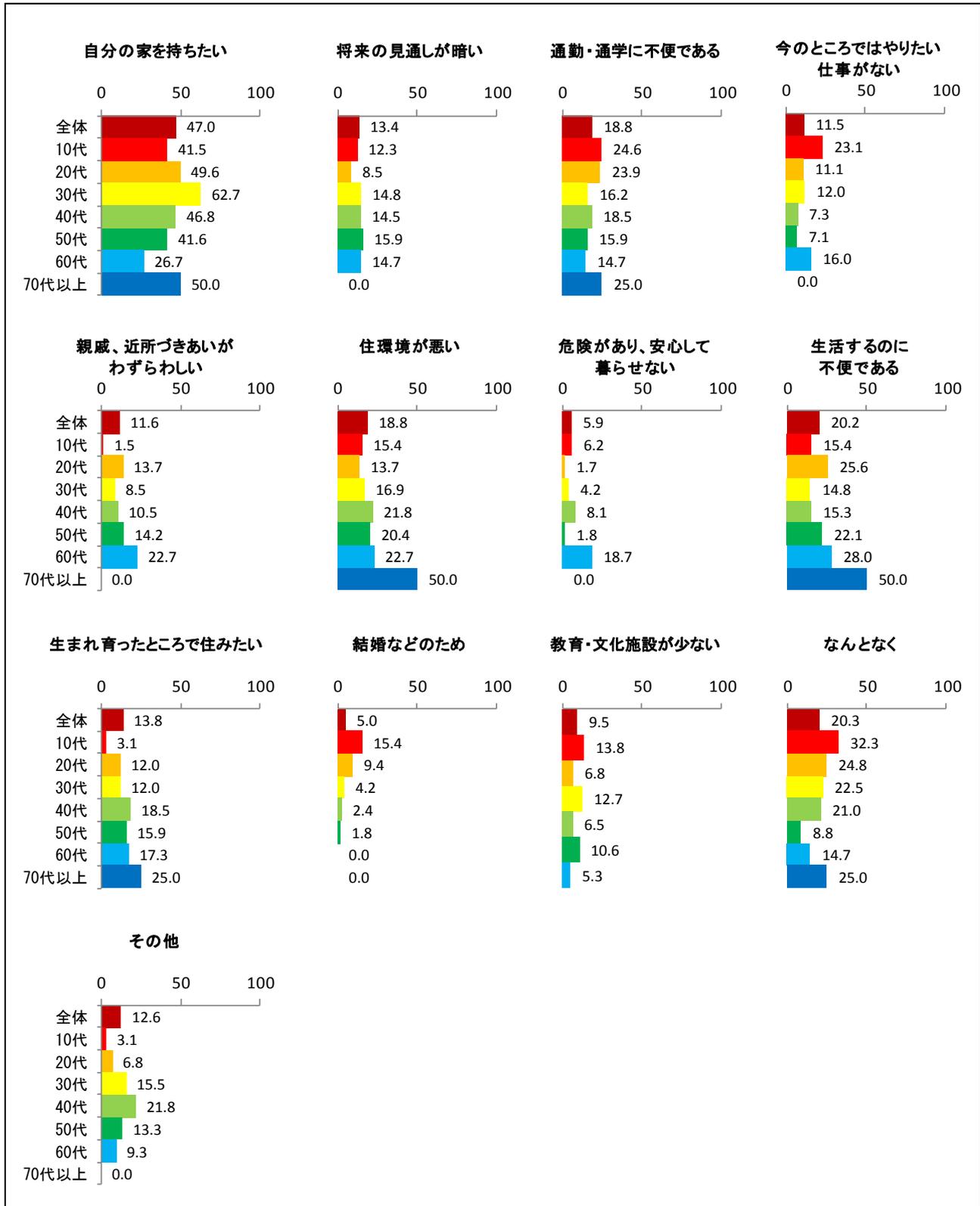
移転希望の理由を地域別で見たものが図 4-1-8 である。「自分の家を持ちたい」ことを理由に移転を希望するのは、北部で65.2%と高くなっている。「通勤・通学に不便である」は南部で28.6%、北部で26.1%、「生活するのに不便である」は八重山で30.4%、北部で26.1%と高い。「今のところではやりたい仕事がない」は八重山で30.4%、宮古で25.9%と高い。「将来の見通しが暗い」は宮古で25.9%、「親戚、近所づきあいがわずらわしい」は南部で22.9%とそれぞれ他の地域より高い。「住環境が悪い」は那覇市で26.1%、中部で21.5%と高い。

図 4-1-8 地域別 移転希望の理由 (%)



移転希望の理由を年代別で見たものが図 4-1-9 である。「自分の家を持ちたい」を移転希望の理由として一番多く答えたのは30代であり 62.7%となっている。「通勤・通学に不便である」「今のところではやりたい仕事がない」は年代の低い層で高くなっている。「生活するのに不便である」は20代と50代以上で他の年代より高くなっている。

図 4-1-9 年代別 移転希望の理由 (%)

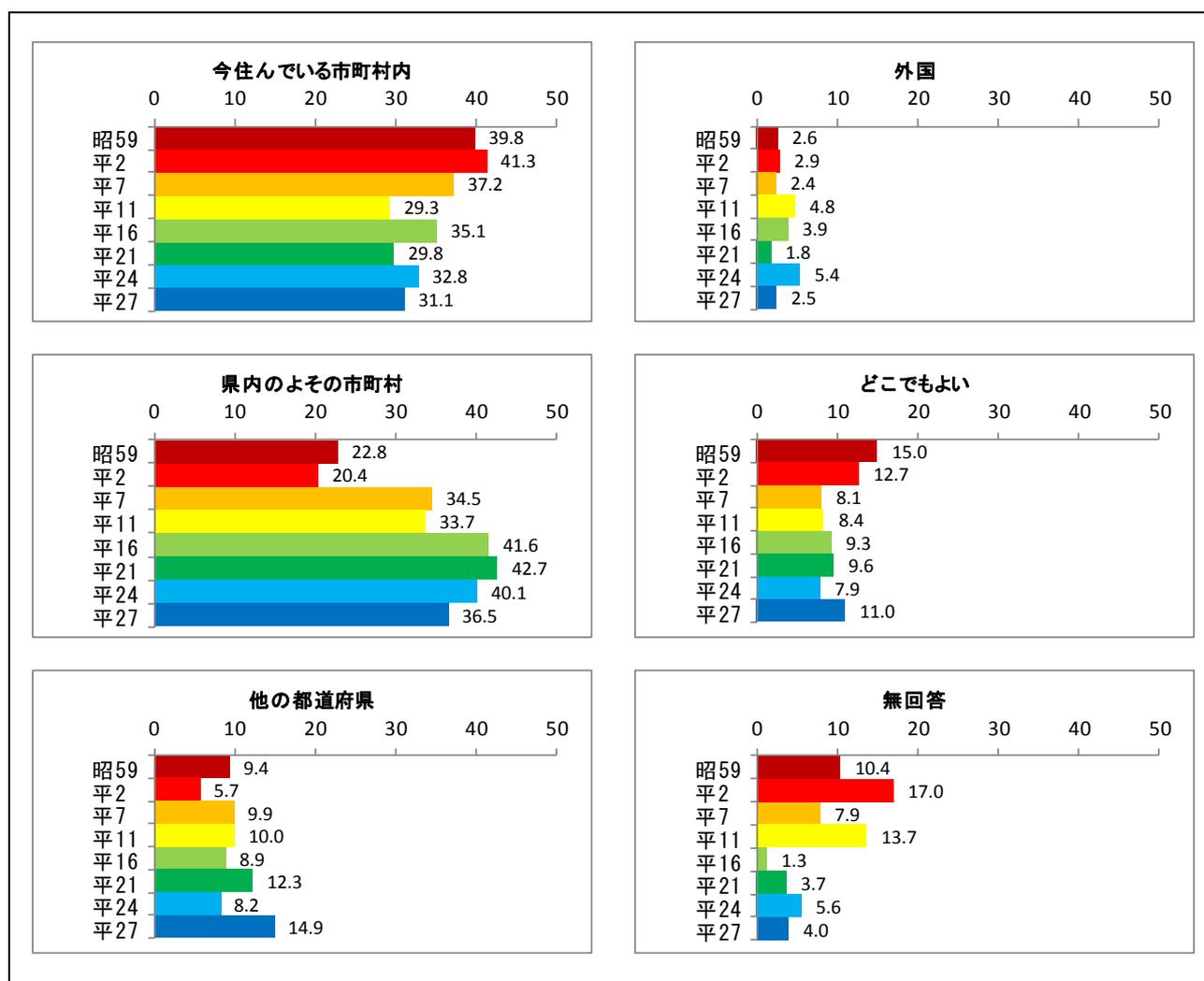


#### (4) 移転希望先（問7-3）

さらに「移転型」の回答者に対して移りたい場所を5つの選択肢から選んでもらった。移転希望先の1位は、「県内のよその市町村」（36.5%）で、2位は「今住んでいる市町村内」（31.1%）で前回とその順位は変わらないが、両者の差は年々縮まっている。

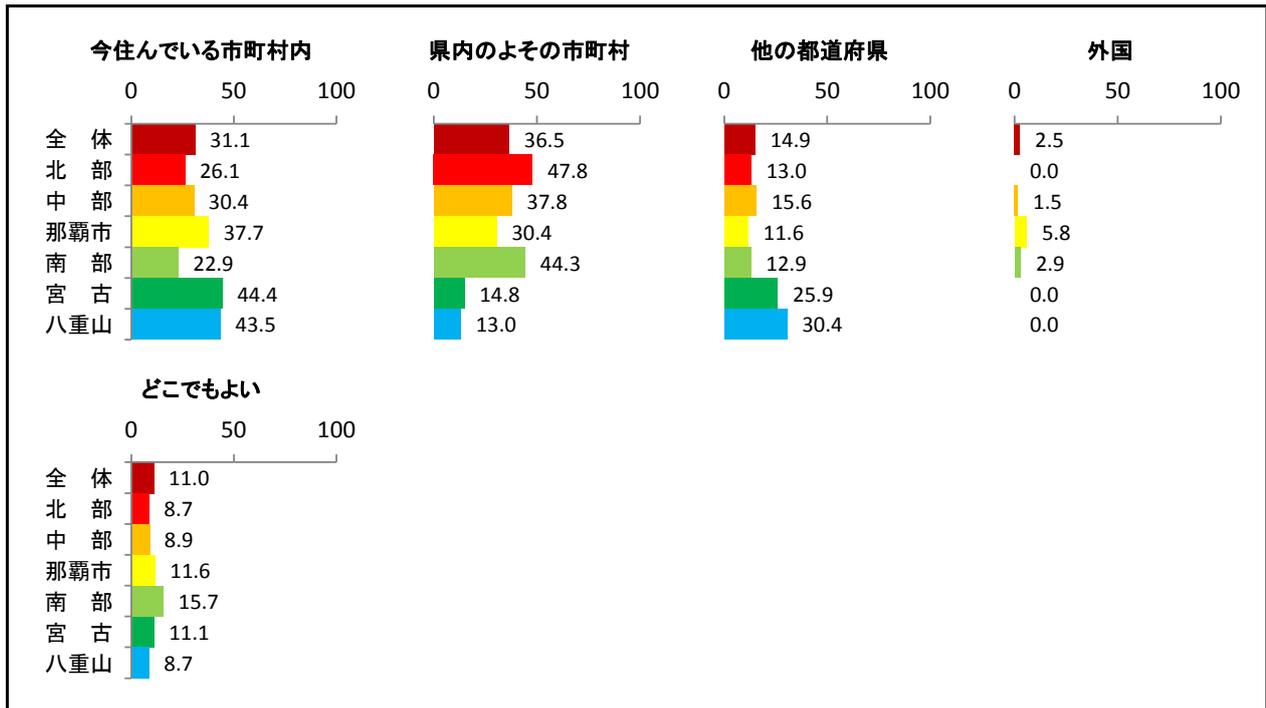
この両者をあわせた「県内移転希望」は67.7%と前回の72.9%から低下している。「ほかの都道府県」（14.9%）、「どこでもよい」（11.0%）とは大きな差が見られるが、前回調査からは「他の都道府県」が6.7ポイント、「どこでもよい」が3.1ポイント増加している。

図4-1-10 時系列による移転希望先（%）



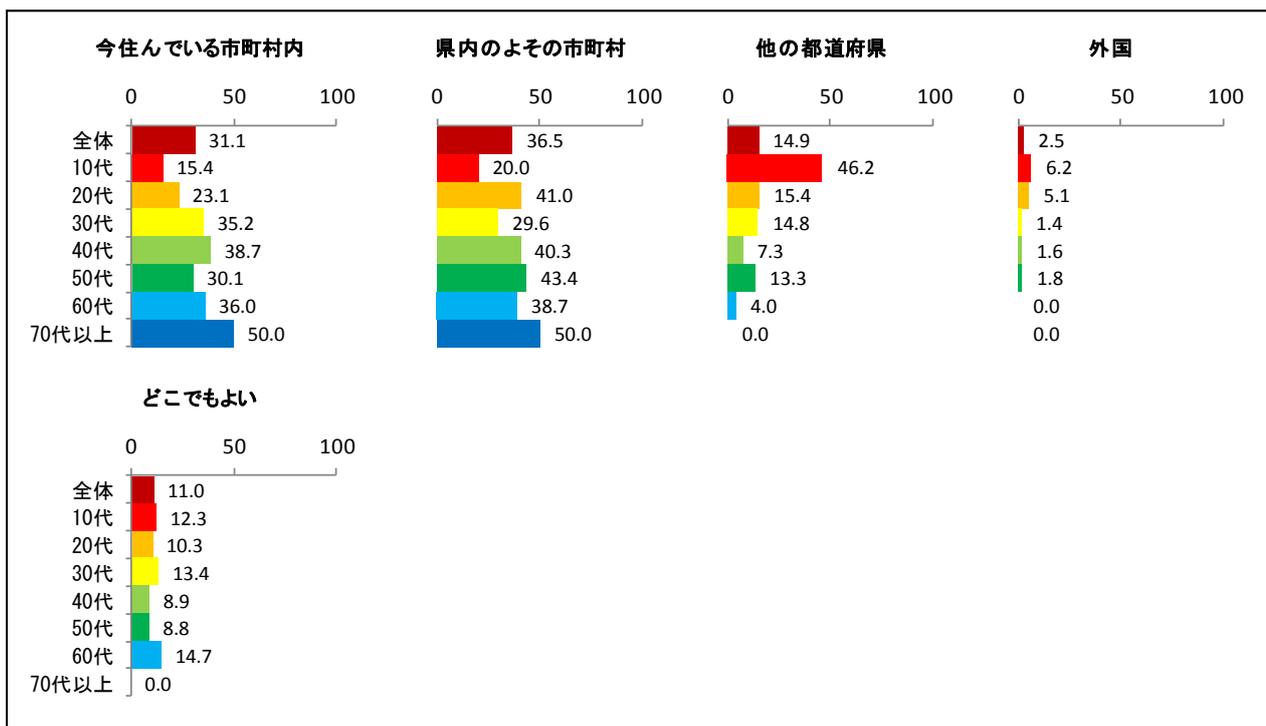
地域別に移転希望先を見たものが図4-1-11である。「県内のよその市町村」は北部（47.8%）、南部（44.3%）で高く、宮古（14.8%）、八重山（13.0%）で低い。宮古、八重山では「今住んでいる市町村内」が44.4%、43.5%を4割を超え、最も高い移転先の希望となっている。同じく那覇市でも「今住んでいる市町村内」が37.7%となり、「県内のよその市町村」の30.4%を上回る。また、「他の都道府県」は宮古（25.9%）、八重山（30.4%）で高くなっている。

図 4-1-11 地域別 移転希望先 (%)



移転先希望を年代別に見たものが図 4-1-12 である。「今住んでいる市町村内」は 30代(35.2%)、40代(38.7%)、60代(36.0%)で、「県内のよその市町村」は 20代(41.0%)、40代(40.3%)、50代(43.4%)で高くなっている。「他の都道府県」は 10代で 46.2%と目立って高い。

図 4-1-12 年代別 移転希望先 (%)



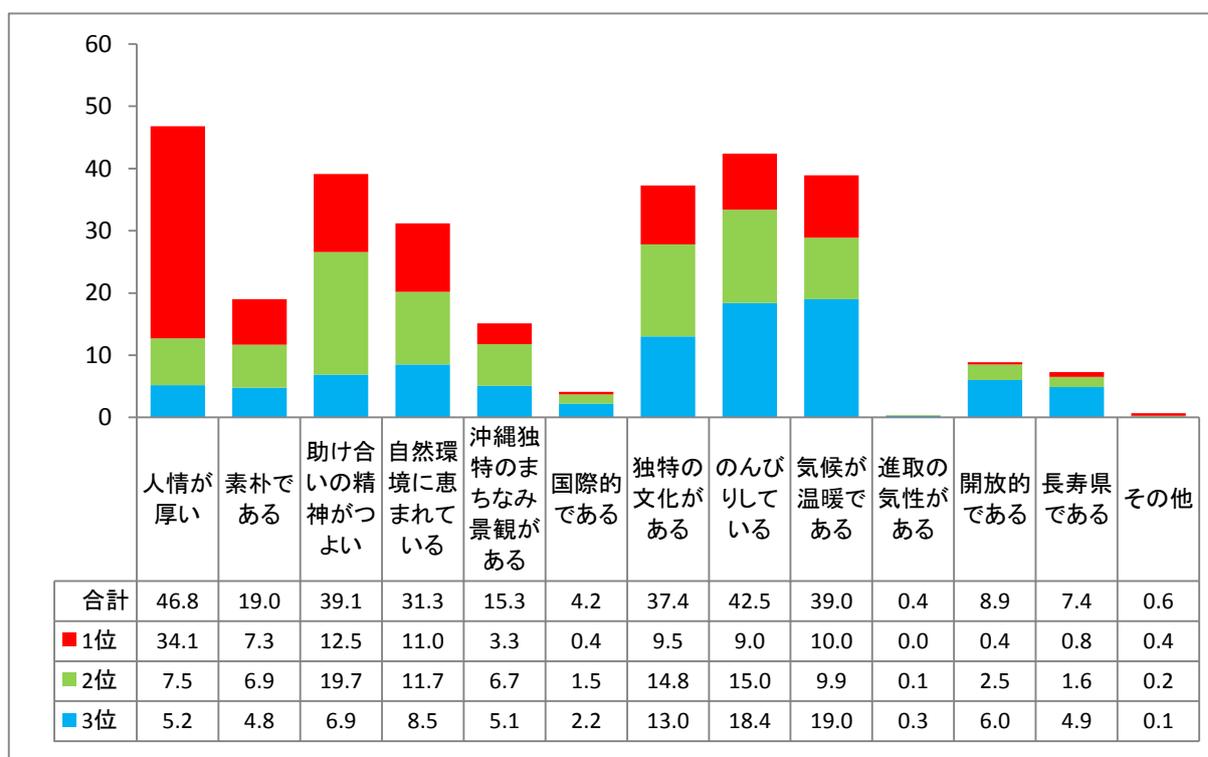
## 2. 県（民）の長所・短所（問8）

### (1) 県（民）の長所（問8-1）

本県あるいは県民の「長所」についてどのように認識しているか、13の選択肢の中から1位、2位、3位と順位をつけて3つを選択してもらった。

県（民）の長所をどう意識しているか県全体で見てみたのが図4-2-1である。前回同様「人情が厚い」（46.8%）を長所ととらえている比率が最も高い。以下、「のんびりしている」（42.5%）、「助け合いの精神が強い」（39.1%）、「気候が温暖である」（39.0%）、「独特の文化がある」（37.4%）、「自然環境に恵まれている」（31.3%）などの項目が高くなっている。

図4-2-1 県（民）の長所（%）

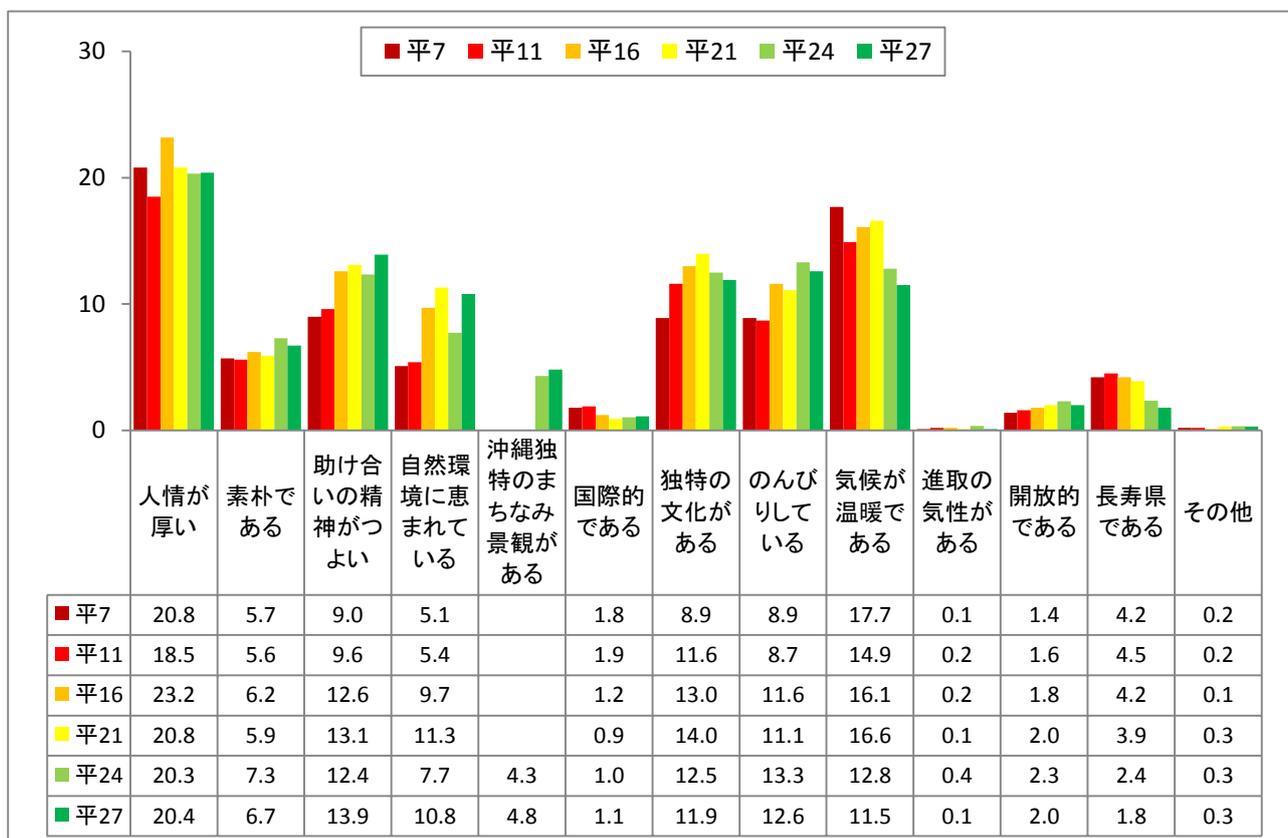


選択された長所を総合的に評価するため、1位に3点、2位に2点、3位に1点のウェイトづけをして、各長所の加重平均を求め県全体の評価を示し、さらにそれを時系列で見たものが図4-2-2である。

長所として最も高い数値を示している項目は「人情が厚い」(20.4)であり、前回調査の20.3とほぼ同水準となっている。次いで、「助け合いの精神がつよい」(13.9)、「のんびりしている」(12.6)、「独特の文化がある」(11.9)、「気候が温暖である」(11.5)、「自然環境に恵まれている」(10.8)が続いている。1位の「人情が厚い」のみ20を超え、他の項目は10台の数値となっている。

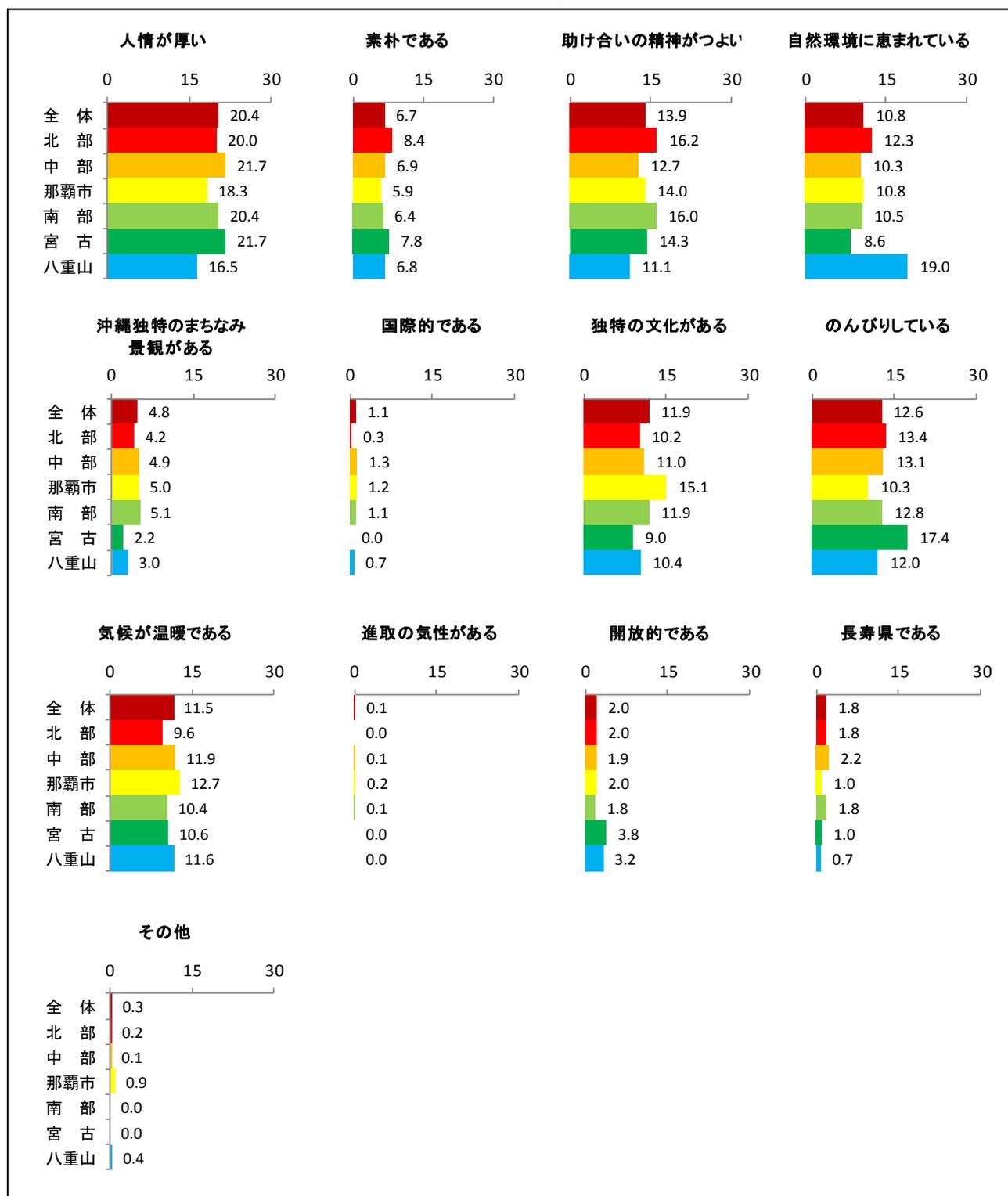
前回調査と比較すると、「自然環境に恵まれている」は、前回調査で11.3から7.7へ減少したが、今回調査で10.8へと増加した。そのほかでは「助け合いの精神がつよい」が12.4から13.9へとやや増加し、「気候が温暖である」が12.8から11.5へとやや減少した。

図4-2-2 県(民)の長所(加重平均)



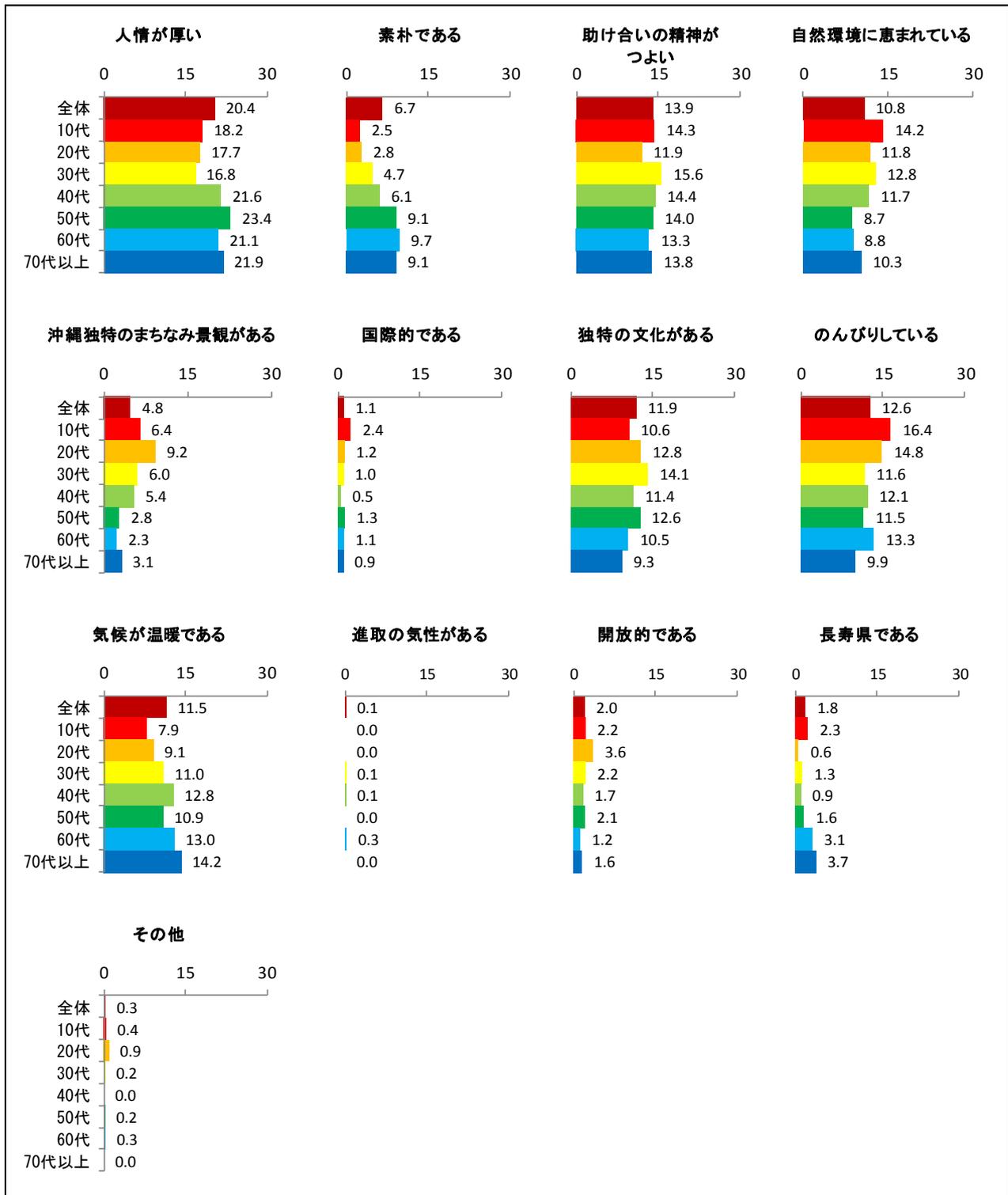
県（民）の長所をどう認識しているかを地域別で見たのが図 4-2-3 である。最も特徴的なのは「自然環境に恵まれている」で八重山が 19.0 と他の地域より高い値となっていることである。全体で最も高い「人情が厚い」は八重山を除く地域では、20 前後と他の項目を上回り最も高い値となっている。その他の項目では「助け合いの精神がつよい」は北部（16.2）と南部（16.0）で、「独特の文化がある」は那覇市（15.1）で、「のんびりしている」は宮古（17.4）でそれぞれ他の地域より高くなっている。

図 4-2-3 地域別 県（民）の長所（加重平均）



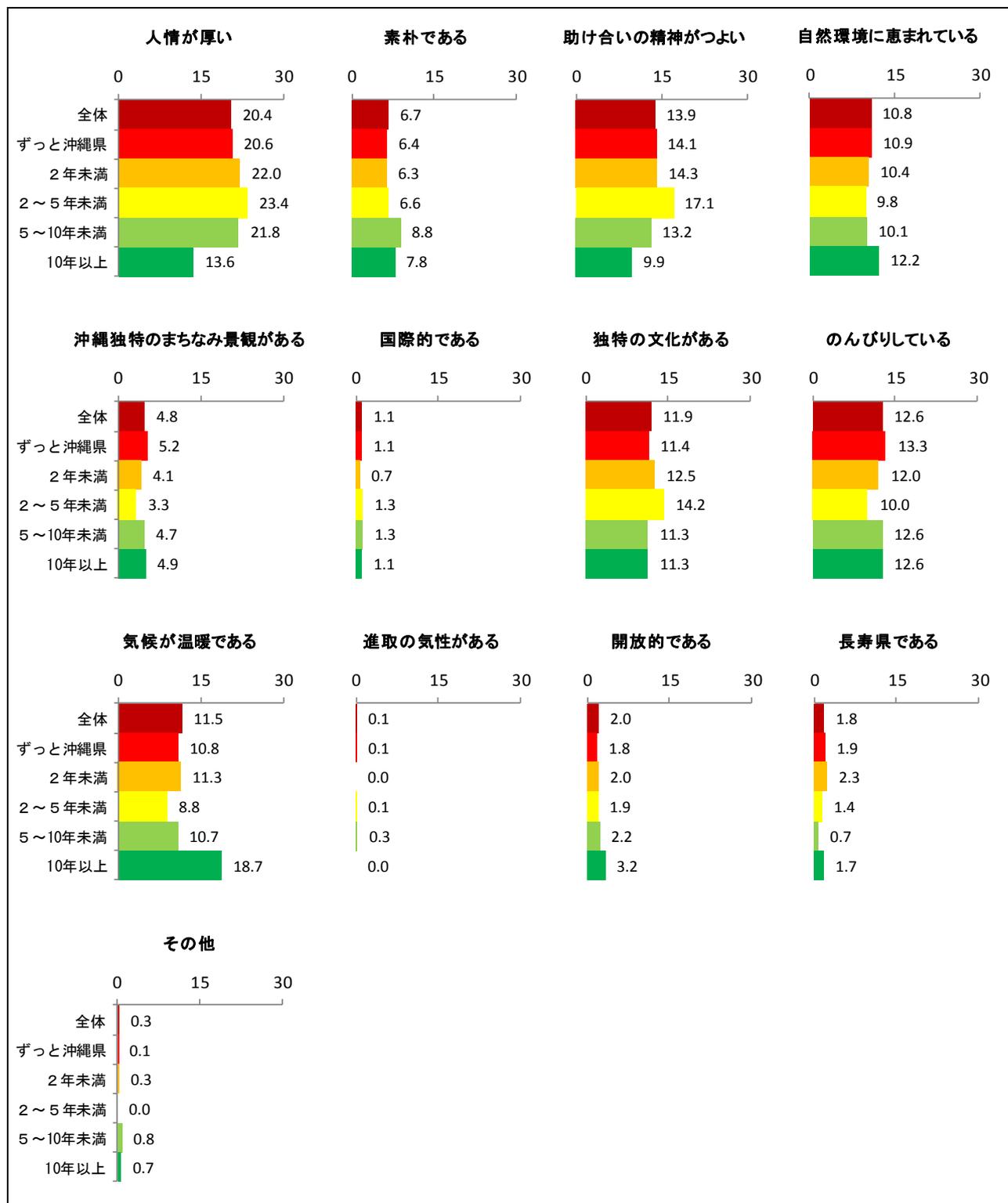
県（民）の長所の認識を年代別で見たのが図 4-2-4 である。「人情が厚い」はどの年代においても長所として高い値となっている。40 代以上では 20 台の値となっているのに対し、30 代以下の年代では 10 台の値となり、年代差が見られる。「素朴である」は 40 代以下に比べ 50 代以上で高くなっている。「自然環境に恵まれている」「のんびりしている」は若年層で高くなっている。その他は、「沖縄独特のまちなみ景観がある」は 20 代で高くなっている。

図 4-2-4 年代別 県（民）の長所（加重平均）



県外居住経験の年数によって県（民）の長所の認識に差が出てくるかどうかを見たのが図4-2-5である。県外居住経験が10年以上の人では「人情が厚い」の値が13.6と他の層に比べ低くなり、「気候が温暖である」が18.7と最も高くなっている。

図4-2-5 県外居住経験 県（民）の長所（加重平均）

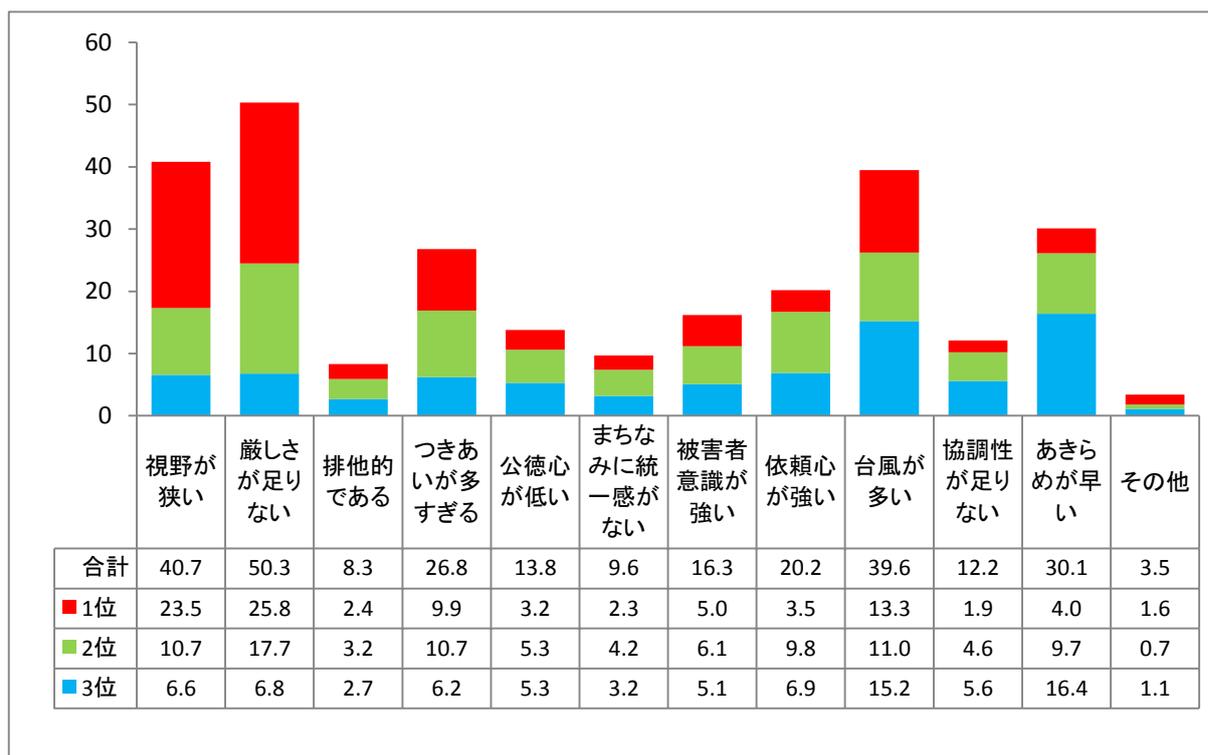


## (2) 県（民）の短所（問8-2）

長所と同様に、本県あるいは県民の「短所」について、12の選択肢から順位をつけて3つを選択してもらったのが図4-2-6である。

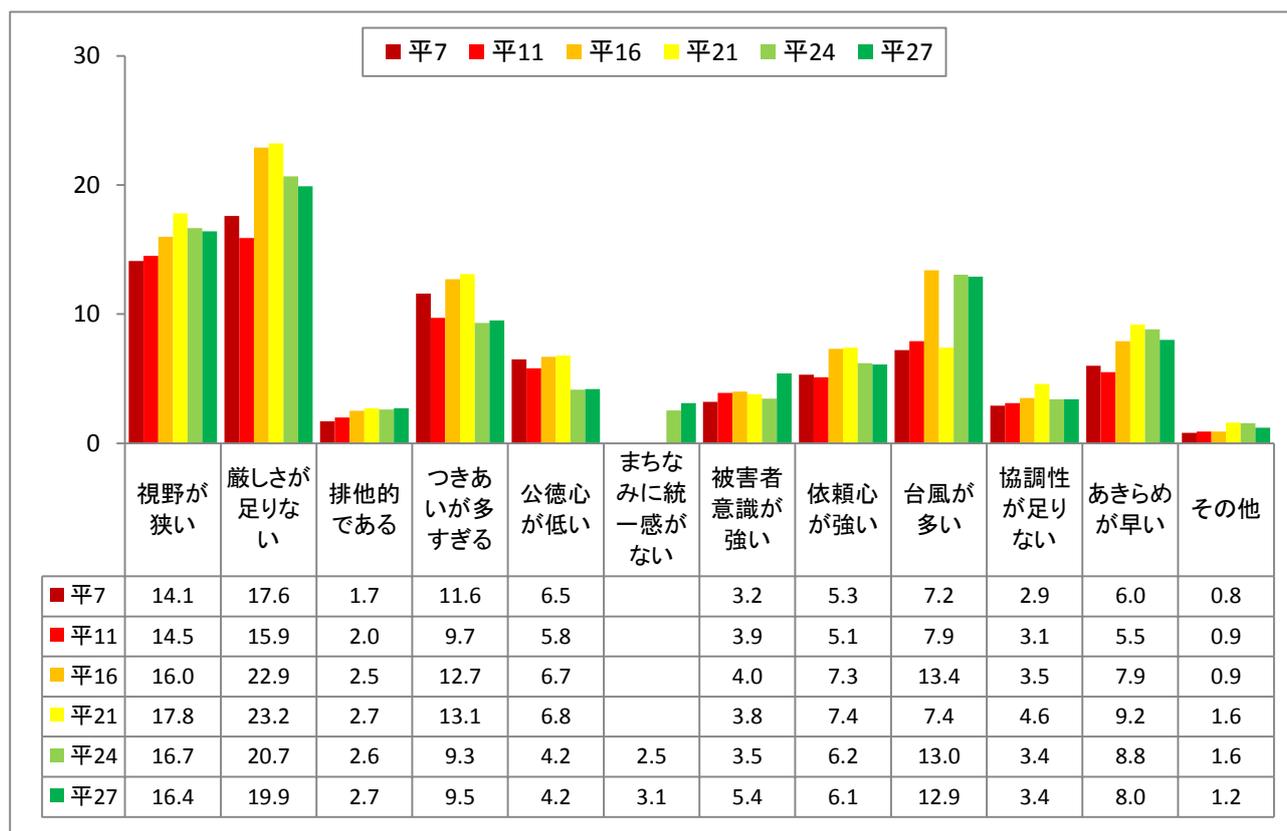
「厳しさが足りない」が短所として最も高い比率（50.3%）となっている。次いで「視野が狭い」（40.7%）、「台風が多い」（39.6%）が続く。ここまでの3項目は、1位として挙げられた比率が高い項目が合計値でも順になって並んでいる。「あきらめが早い」（30.1%）は合計値では4番目に高いが、1位として挙げた人は4.0%と少ない。

図4-2-6 県（民）の短所（%）



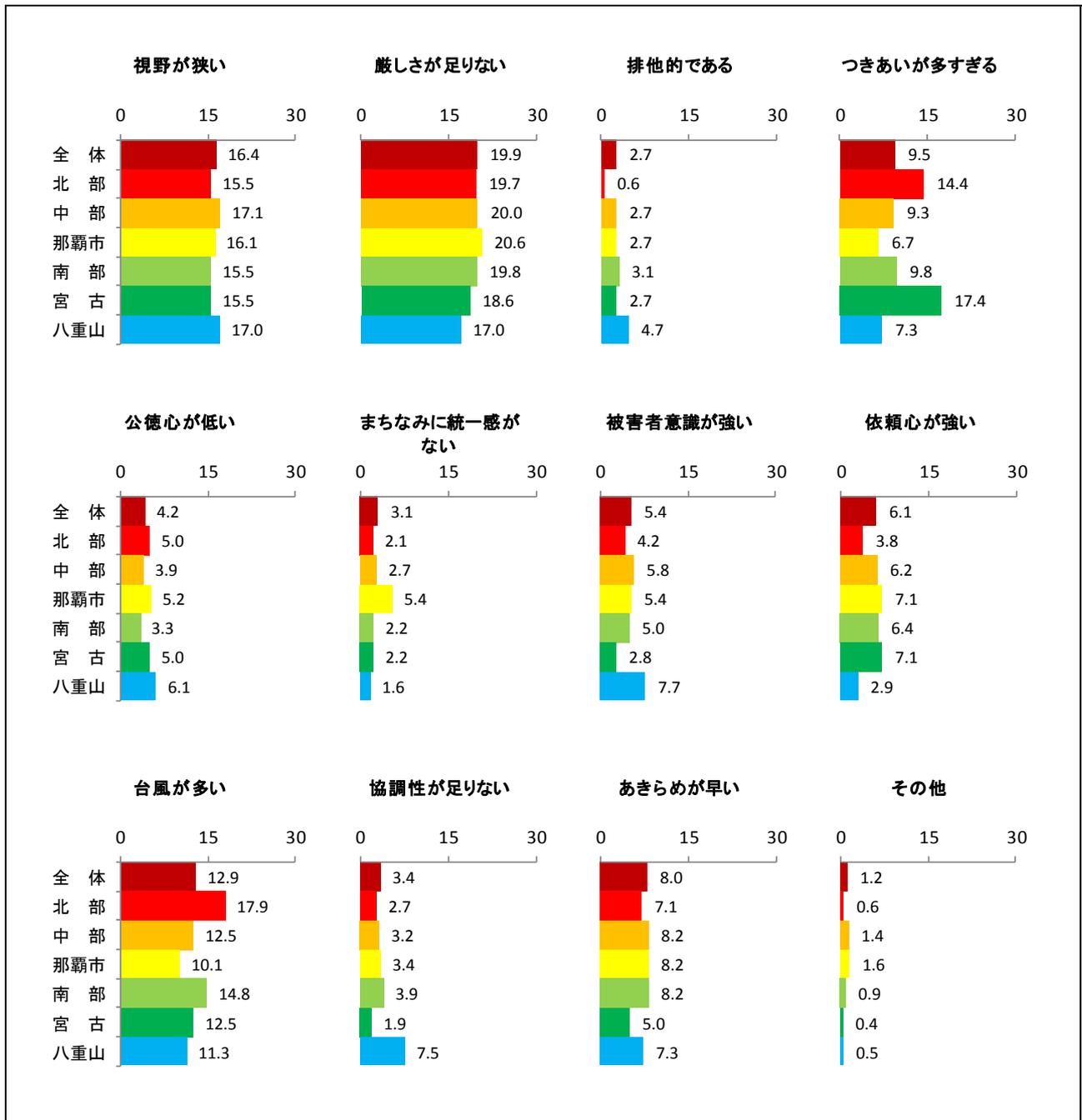
選択された短所を総合的に見るため、1位に3点、2位に2点、3位に1点のウェイトづけをして各短所の加重平均を求めた。加重平均で見た時系列の県（民）の短所が図4-2-7である。短所として最も高い数値を示しているのは前回と同じく「厳しさが足りない」（19.9）であるが、平成21年度をピークに減少している。次いで「視野が狭い」（16.4）、「台風が多い」（12.9）となっている。前回調査から最も大きく変化した「被害者意識が強い」でも3.5から5.4への1.9の増加であり、前回調査と大きな変化は見られない。

図4-2-7 県（民）の短所（加重平均）



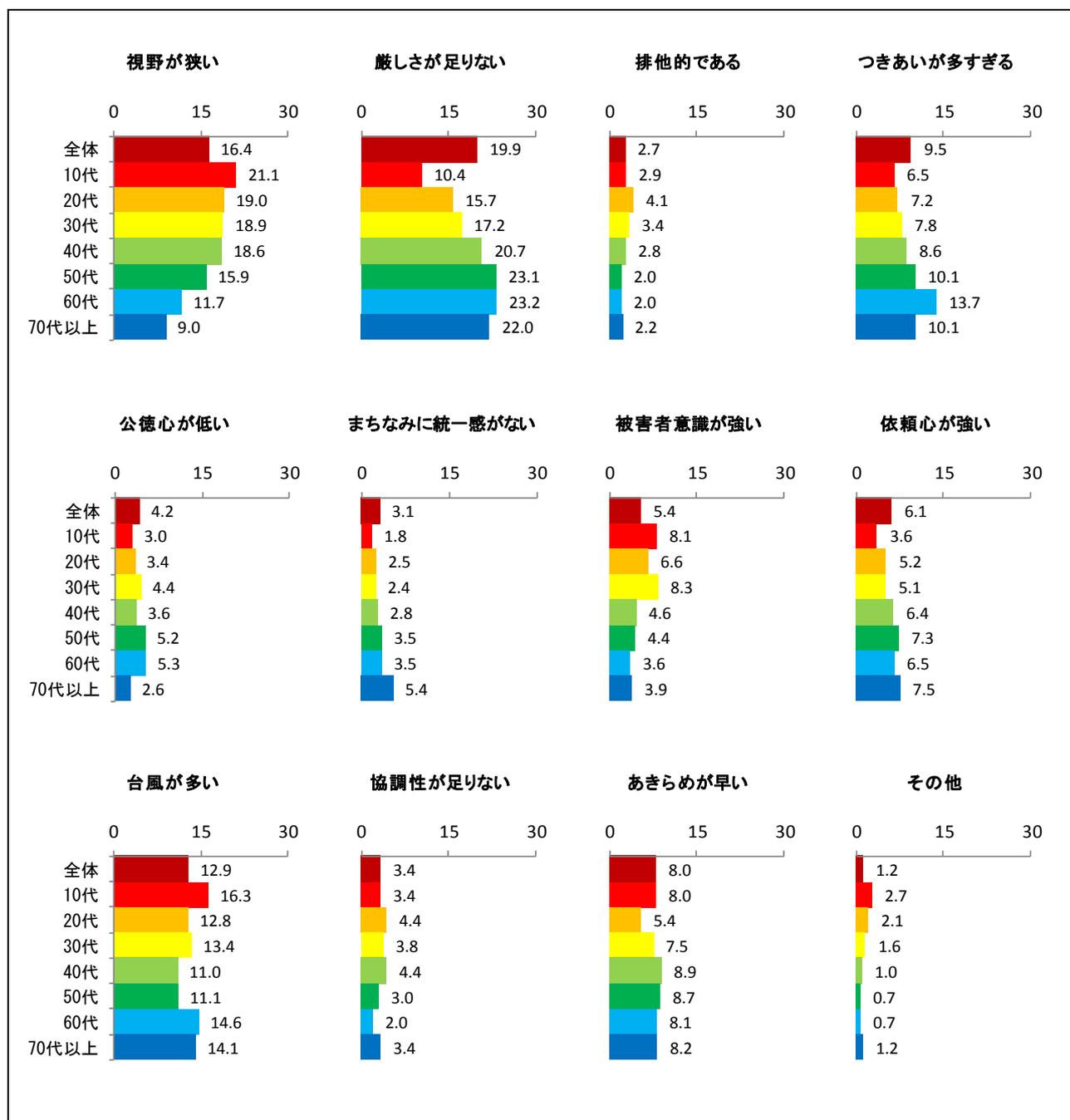
県民が短所をどう見ているか地域別で見たのが図4-2-8である。地域差が出ているのは「つきあいが多すぎる」で宮古は17.4、北部は14.4と他の地域より高い。また、「台風が多い」は、北部（17.9）と南部（14.8）で高い値となっている。全体で最も高い値を示した「厳しさが足りない」は、八重山で17.0と最も低く、八重山では「被害者意識が強い」（7.7）と「協調性が足りない」（7.5）が他の地域より高くなっている。

図4-2-8 地域別 県（民）の短所（加重平均）



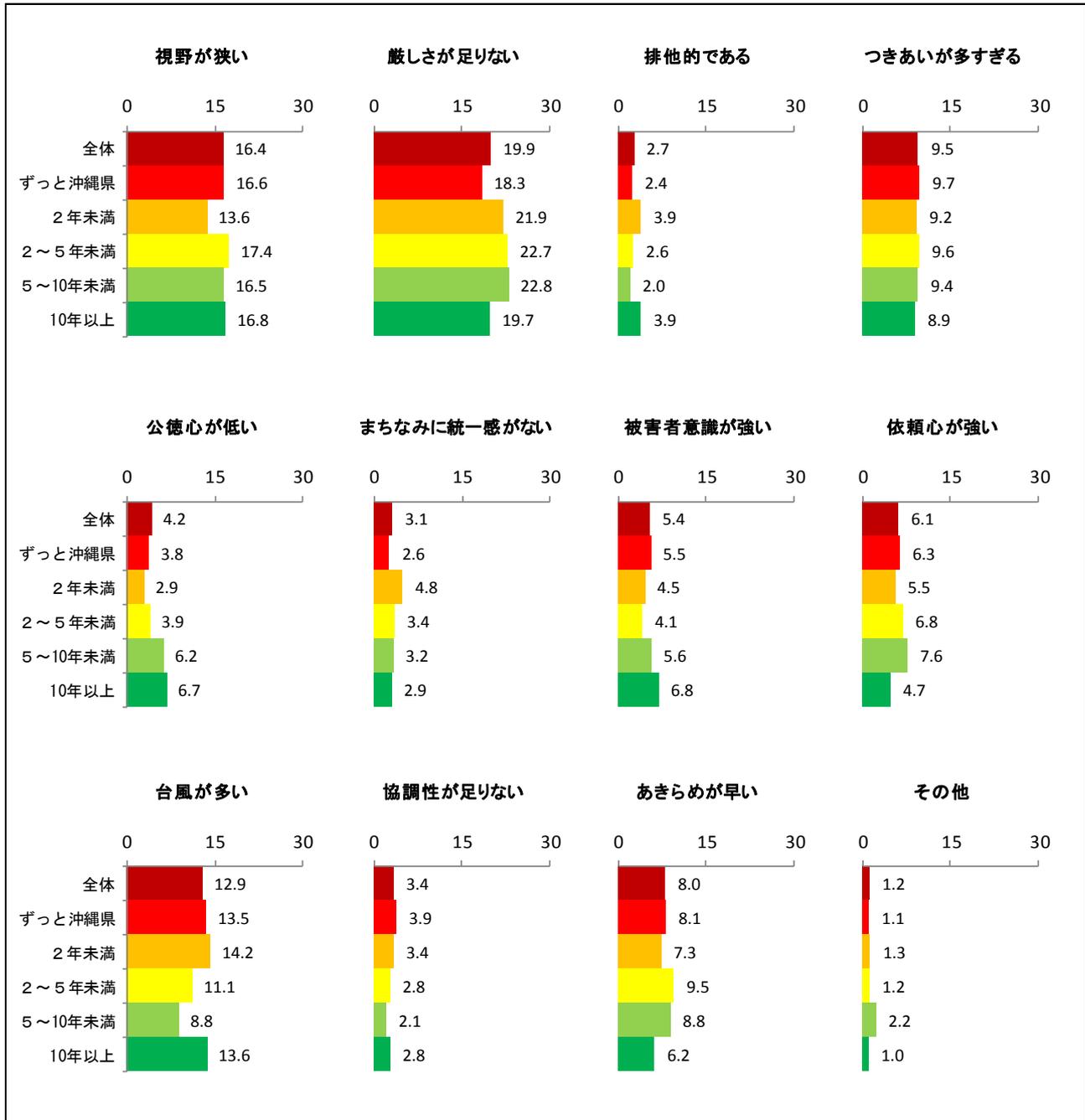
年代別に見ると、短所として県平均で1位の「厳しさが足りない」という項目は、概ね年代が高くなるにつれて短所として認識される比率が高くなる。「つきあいが多すぎる」も同様の傾向がある。これに対し、「視野が狭い」「被害者意識が強い」は年代が低いほど値が高くなる傾向が見られる。

図 4-2-9 年代別 県（民）の短所（加重平均）



県外居住経験によって、県（民）の短所の見方に違いがあるのかどうかを見たのが図4-2-10である。「公德心が低い」は県外居住経験年数が長いほど値が高くなる傾向がある。

図 4-2-10 県外居住経験 本県（民）の短所（加重平均）



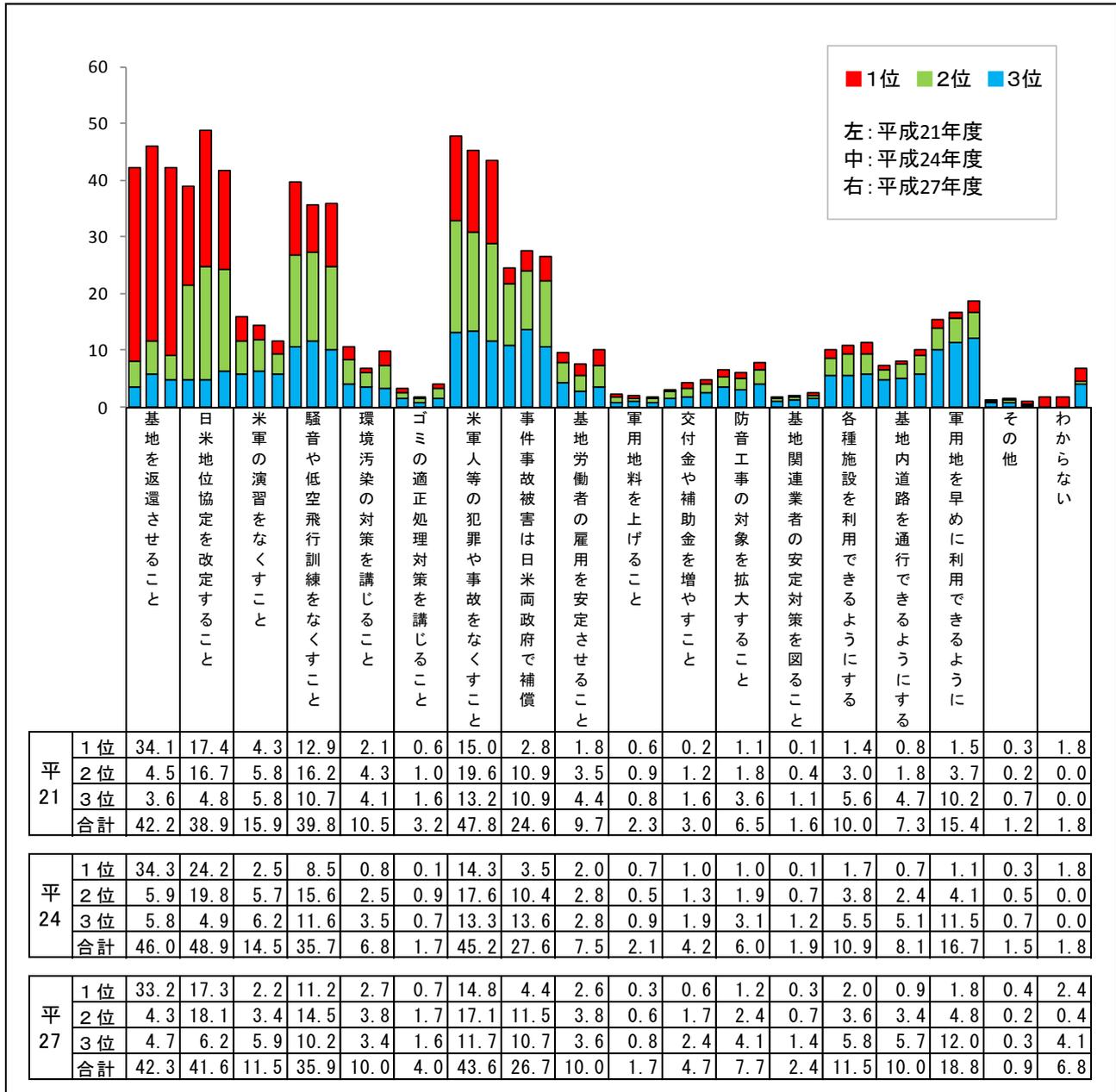
### 3. 米軍基地に関する行政への要望（問 13）

#### (1) 順位別に見た米軍基地に対する要望

米軍基地から派生する様々な課題について選択肢を示し、県や国として特に力を入れてほしいものについて、順位を付けて3つ選んでもらった。

過去2回の調査（平成21年度調査、平成24年度調査）結果との比較を示したのが図4-3-1である。

図 4-3-1 米軍基地に関する行政への要望（%）



その結果、力を入れてほしい対策の第1位としては「基地を返還させること」(33.2%)が最も高く、次いで「日米地位協定を改定すること」(17.3%)、「米軍人等の犯罪や事故をなくすこと」(14.8%)の順となっている。この順位は前回調査と比べて変化は見られない。

第2位については、「日米地位協定を改定すること」(18.1%)が最も高く、次いで、「米軍人等の犯罪や事故をなくすこと」(17.1%)、「騒音や低空飛行訓練をなくすこと」(14.5%)、「事件事故被害は日米両政府で補償」(11.5%)といった順に要望が高い。

第3位については、「返還された軍用地を早めに利用できるようにすること」(12.0%)が最も高く、次いで「米軍人等の犯罪や事故をなくすこと」(11.7%)、「事件事故被害は日米両政府で補償」(10.7%)、「騒音や低空飛行訓練をなくすこと」(10.2%)の順となっている。

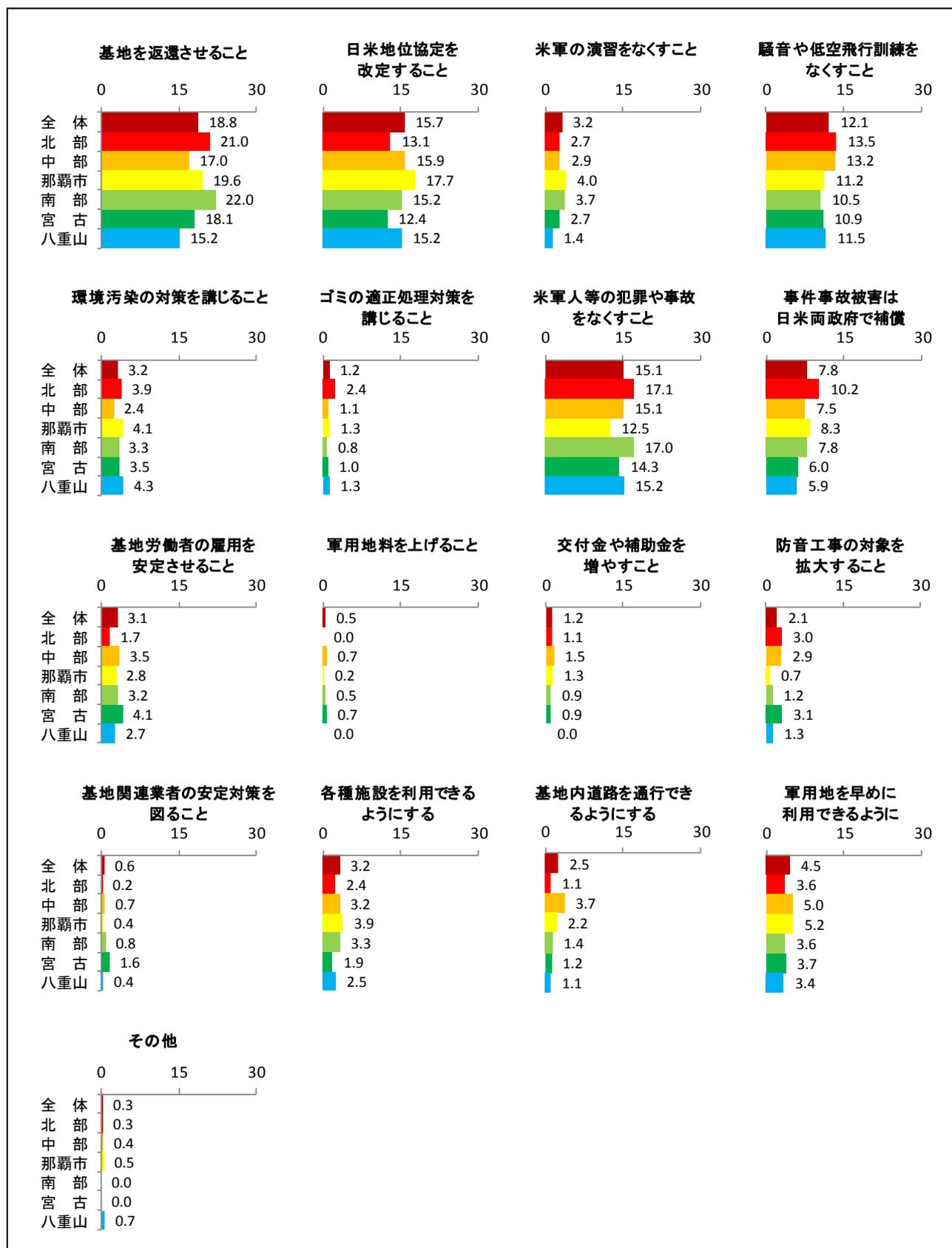
これら1～3位の合計では、前回調査が「日米地位協定を改定すること」(48.9%)が最も高く、次いで「基地を返還させること」(46.0%)、「米軍人等の犯罪や事故をなくすこと」(45.2%)の順で高かったのに対して、今回の調査では「米軍人等の犯罪や事故をなくすこと」(43.6%)が最も高く、次いで「基地を返還させること」(42.3%)、「日米地位協定を改定すること」(41.6%)の順となっている。

## (2) 地域別で見た米軍基地に関する行政への要望

沖縄県を6地域(北部、中部、那覇市、南部、宮古島、八重山)に分けて、米軍基地に対する要望を加重平均で比較したのが図4-3-2である。この図より、上位項目は図4-3-1で見たように、「基地を返還させること」「日米地位協定を改定すること」「米軍人等の犯罪や事故をなくすこと」「騒音や低空飛行訓練をなくすこと」への要望がすべての地域で高く見られる。

「基地を返還させること」「米軍人等の犯罪や事故をなくすこと」は共に北部と南部で20を超え、他の地域より高い値となっている。「日米地位協定を改定すること」は那覇市で17.7とやや高くなっている。「事件事故被害は日米両政府で補償」は北部で10.2と他の地域より高くなっている。

図4-3-2 地域別 米軍基地に関する行政への要望（加重平均）

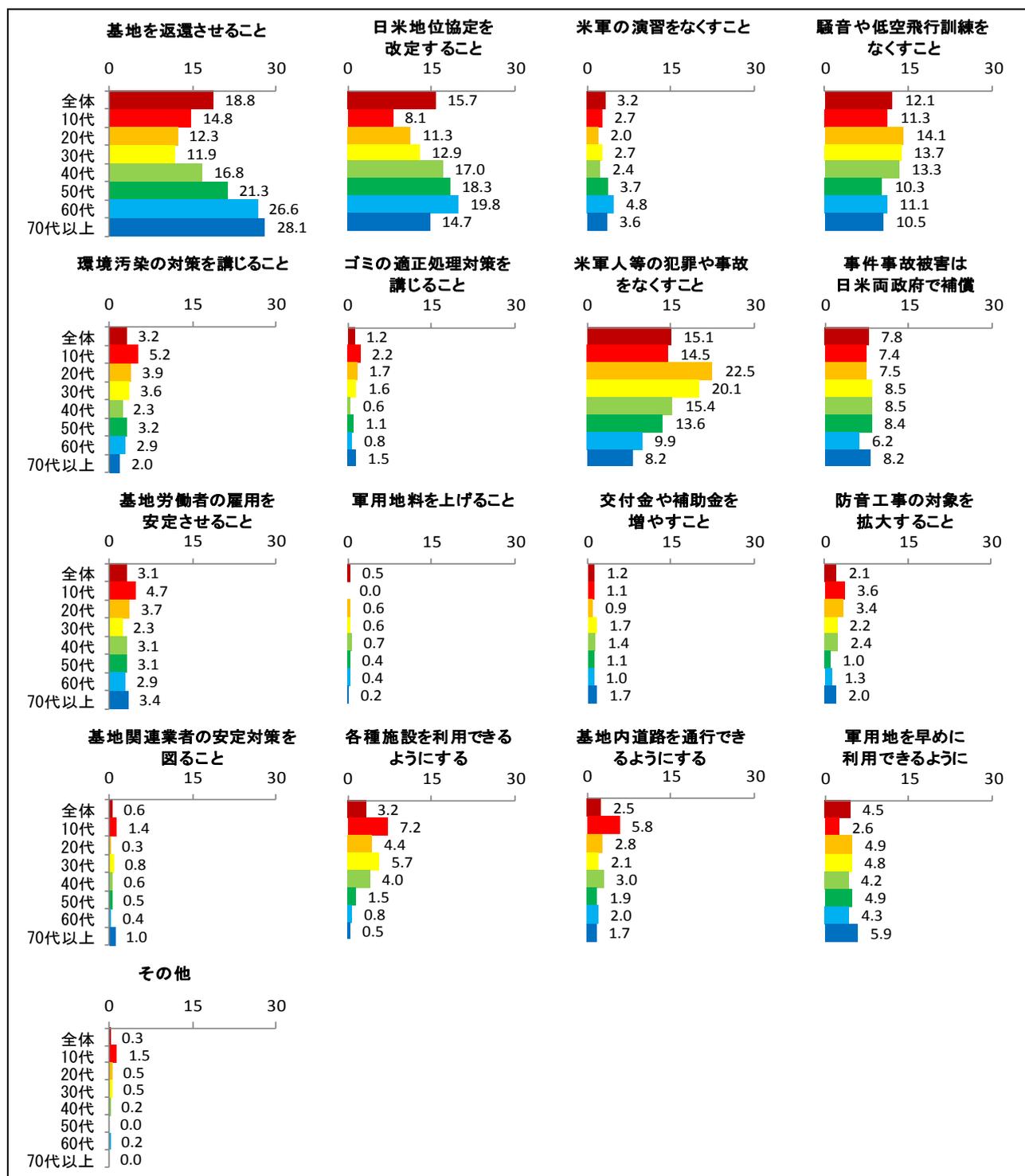


### (3) 年代別で見た米軍基地に関する行政への要望

年代別による米軍基地に対する要望を加重平均で比較したのが図 4-3-3 である。

この年代別をさらに本土復帰以降に生まれた 30 代以下の年代と、40 代以上とに分けて比較すると、30 代以下では「米軍人等の犯罪や事故をなくすこと」で 40 代以上よりも相対的に高い要望が見られる。これに対し 40 代以上は「基地を返還させること」や「日米地位協定を改定すること」で 30 代以下よりも高い結果となっている。

図 4-3-3 年代別 米軍基地に関する行政への要望（加重平均）



#### (4) 性別で見た米軍基地に関する行政への要望

性別による米軍基地に対する要望を加重平均で比較したのが図 4-3-4 である。

「日米地位協定を改定すること」では男性が女性よりも高く、「騒音や低空飛行訓練をなくすこと」では女性が男性よりも高い結果となっている。

図 4-3-4 性別 米軍基地に関する行政への要望（加重平均）

